

近代イギリス・スポーツの発展に関する ピューリタニズムの意義について

山 田 岳 志

Über die Bedeutung des Puritanismus für die Entwicklung der neuzeit England Sports

Takeshi YAMADA

Puritanismus とイギリス文化との関連は、イギリス文化論としてはむしろ常識的なものに属するであろう。しかしそれはまた常識的であるがゆえに、イギリス文化史研究上さけて通ることのできない問題、つまり文化様式 *die Kulturweise* の検討でなければならないように思われる。まして Puritanismus の社会的成長こそはイギリス文化風土を創り出していく上で、いわば社会の生活様式 *die lebensweise* を規定するものとしての思想を定着させていく土台でもあったということを考えれば、J. Strutt が指摘しているように¹⁾、文化史的、社会史的 *Kulturgeschichtlich-sozialgeschichtlich* に近代イギリス・スポーツを研究していこうとする場合、Puritanismus をその社会的発展過程において把握することが思想的研究の手がかりにもなるように思われるからである。本論において、近代イギリス・スポーツの発生的研究において看過しえない社会的、歴史的条件 *die gesellschaftlich-historischen Bedingung* としての Puritanismus の意義について、ある意味においては常識的見解を従来の研究成果に若干の試解を加えながら思想的研究を試みた。

序 論

「人文主義者達が精神的な側面も身体的な側面も考慮しつつ全面的な教育の必要性をきわめてはっきり力説している間も、事実としては身体文化の衰退がたえず進行していた。そして遂に18世紀に入ってあらゆる身体訓練をほぼ完全に消滅させるに至る。」²⁾ Andrzej Wol が指摘するように、18世紀になってそれまでイギリス人の生活に密着していた民衆のスポーツ *Volkstümlichspiel* が消滅の一途をたどっていた時、農業革命、産業革命を契期に成長してくる新興ブルジョワジーによって近代スポーツが形成されつつあった。それは社会的には、農業革命の進行においてヨーマン *Yeoman* が消滅し、農村から都市へ産業革命に必要な工業労働力が供給されるという時代的背景があった。³⁾ このように、それは古代ギリシャ人の身体文化 *Körperkultur* が高度な精神文化 *geistigekultur* によってポリス市民のアレテー *«Aretē»* として身体訓練が不可欠の要素であったのに対して⁴⁾、イギリスにおいて統一的体系 *einheitlichsystem* をもたなかった民衆のスポーツ *Volkstümlichspiel* や、形式化してしまっていた貴族的スポーツ⁵⁾

Aristokratischspiel にかわって、ブルジョワのスポーツとして特定の階級にだけ通用する、つまり近代的スポーツが形成されてくるのである。⁶⁾ この原因こそは Tawney が指摘した「興隆してはいたものの、なお勝利を収めるにはいたっていなかった17世紀初期のブルジョワジーにとっては、この魔法の鏡となった」⁷⁾、Puritanismus であり、その発展過程において中心的な担い手であり次第にジェントリー *Gentry* と呼ばれる地位を獲得していった中産の生産者層の社会的成長であった。⁸⁾ この Puritanismus の社会的発展にともなって成長してくる中産の生産者層こそ、まさしく近代的スポーツそのものに対して重要な思想的規定性をもつものであったろうと思われる。本論においては、17世紀のイギリスにおける Puritanismus の社会的発展が、近代イギリス・スポーツの思想的形成にどのような影響をもつものであったのかを、若干の資料をもとに考察を試みるのであるが、従来、各時代における体育思想史的研究方法をみてみると、それがその時代のすぐれた体育思想家(あるいは教育思想家、哲学者の体育論)を強く打ち出すことによって、その時代の体育的状況を分析してきたように

思われる。しかしながら、このような研究方法がややもすれば落ち入りやすい全体的な体育的条件や、それをとりまく社会的条件の追求不足、つまり、当時の歴史的现实と思想家との交渉の欠落という思想史的研究にとつては致命的な問題点が残っていたように思われるのである。9) 本論においては、このような思想史的研究方法に努めながら近代社会の発展過程において現われ、そしてその社会構造 *die sozialestruktur* の変化に対応していた『ルネサンス的人間像』、『宗教的人間像』10)、との係り合いのなかで、封建的社会 *feudalistishsoziale* のスポーツを近代的社会のスポーツに発展させていく過程において、一種の選択的透過作用¹¹⁾ともいうべき性格をもっていたと思われる *Puritanismus* に焦点をあてながら本論へのアプローチを思想史的 *geistesgeschichte* に試みるものである。

I 中世的・ルネサンス的スポーツ

古代ギリシャや近代的身體訓練が体系的性格 *Systematischcharakter* をもって展開されたのに対して、*Andrzej Wol* が指摘しているように、中世的、ルネサンスの身體訓練は教会や学校においては学問としての地位すら認められていなかった。そしてそれは単に伝統と習俗に支えられていただけであり学校への影響というものももっていなかった。12) しかしながら、このようなことが中世やルネサンス期においてスポーティな活動が存在してなかったことを意味するものではなかった。中世より身體文化 *Körperkultur* として認められていたものに騎士文化 *Ritterkultur* の支柱ともなった騎士訓練があった。しかもここにおいて行なわれた身體訓練はそれ自体階級性格をもつものであったし、騎士文化特有の特権的文化 *die privilegiumkultur* としての必要性から生じたものであり、庶民的身體活動 *Volkstümlichspiel* とは区別されるものであった。13) こうしたことはキリスト教会の理念が、身體的活動 *körperliche Betätigung* をして貴族教育 *Adelserziehung* に奉仕するものでないかぎり価値の低いものとみなしていたことから当然であった。14) しかしながら、このような中世的封建社会からみられた騎士道の精神 *die Rittergeist* もルネサンスのヒューマンズムの影響をうけるようになってくるのである。それは社会的条件、つまりイギリスにおいて激しい社会的新陳代謝 *sozialserneuerung* の時代を意味するものであった。そこで、*Thomas Elyot*, *Ascham Roger* はそれまでの武芸一筋の *Caxton* の意味における騎士道の精神にもう一つのルネサンス的『教養』*Bildung* をも身につけるよう主張し、そのようなルネサンス的文化を備えた人間像こそは時代的環境に妥当性をもつものであるとしたのである。

このように、ルネサンスの身體訓練においても *Thomas Elyot*, *Ascham Roger* は階級的偏見と徳育的把握、そして知的教養とともに貴族的スポーツによるこびを見いだすよう主張するのである。つまり新しいジェントリー *gentry* の出現を論じるなかで、それがルネサンスの感覚でなされなければならないとしたのである。しかもこのようなことは依然として階級性格 *klassencharakter* を堅固するものであって、*Thomas Elyot* をしてスポーツに関するイギリス的思想の端緒をもたらしたが¹⁵⁾、他方イギリスのルネサンスの性格が中世的な性格の範囲を越えるものではなかったことも歴史的事実であったろう。そして、このようなジェントリー *gentry* の出現は *Puritanismus* によって展開される社会的生産者層と対比してイギリスに二面的な教育構造をもたらすような結果になってくるのである。16) さて、中世・ルネサンス期において史的考察によって明示されてくる民衆的スポーツ *Velkstümlichespiel* (こそはイギリス的なものを反映しており、それはまた社会的機能体としての発展でもあったろう。17) それは、やがて近代のスポーツに発展してくるようなスポーティな活動が都市や農村をとわず多数の人々によって実施されていたのであり、われわれはその史的事実を確認する必要があるように思うのである。「中世全期を通じて *Murfildes* は従弟やもっと若い仲間たちの練習場となり、彼らは大人になってもなお、休日にはここでレスリングや競争や拳闘や弓術をして過した。若い市民たちに、若い延臣や騎士見習いつまり『まだ騎士の礼帯を授けられていない』少年たちも加わり、みんな槍と楯の練習や運動競技での優勝に懸命であった。」18) このように14世紀、15世紀における *Chaucer* (*G. Chaucer 1345—1400*) が活躍した時代におけるロンドンにおいて若者達は活気にみちたスポーティな遊びを楽しんでいたのである。夏季においては若者たちは、*leaping, dancing, shooting, wrestling, casting the stone*, そして *practising their shields* と、又夏の夕方や公休日には、暇さえあれば弓をひいたり用具の手入れなどにも余念がなかった。また冬季には骨製のスケートをしっかりと足にしばりつけ、先には金具のついた棒で武装し大胆さと不敵さを養うために荒っぽい遊びを楽しんでいた。又、キリスト教的祝祭日にも諸々のスポーティな活動があらゆる階級の人々によって楽しまれたのである。「レントの金曜日には、若者たちの1団が馬にのってやってきて、最高の馬術者が残りの者を指導する。都市の子弟や他の若者達は刃のない槍と楯をもって行進し、それから戦いの技を練習する。」19) <Friday in Lent a fresh company of young men comes into field on horse back, and the best horse man conducteth the rest. Then march

forth the citizen's son, and other young men, with disarmed lances and shields, and there they practice feats of war>, 又「イースターの祝日には, 若者達は流れの真中に固定させたポールに1本の楯をかけ, ボートにのっての楯突きの戦争を行なう. ボートは水の激しい流れによって流れるようにオールのないものが用意される. そしてその前部には若者が立ち, 自分の楯で楯を突けるように身構えている. もし自分の楯がその楯をくだき, しかも自分も水に落ちなかったならばりっぱな行いをなしたとみなされるが, もし楯でくだくことができないうで楯に対して突進すると, ボートが流れのためにはげしいはずみをつけられるために水に落ちてしまう. しかし楯の両側には若者達を大勢のせた2隻のボートが用意されていて落ちるとすぐに救われる. 橋の上や兩岸の船着き場や家からはたくさんの人がそれをみていて笑い楽しむのである.」²⁰⁾ <In Easter holidays they fight battles on the water; a shield is hung upon a pole, fixed in the midst of the stream, a boat is prepared without oars, to be carried by violence of the water, and in the fore part there standeth a young man, ready to give charge upon the shield with his lance, if so be he breaketh his lance against the shield, and doth not fall, he is thought to have performed a worthy deed, if so be without breaking his lance, he runneth strongly against the shield down he falleth into the water for the boat is violently forced with the tide; but on each side of the shield side two boats, furnished with young men, which recover him that falleth as soon so they may, Upon the bridge, wharfs, and house, by the river's side, stand great numbers to see, and laugh thereat> 又「Shrove Tuesday は子供のスポーツで始まり, 子供たちや生徒たちは彼らの先生のところにゲーム用の雄鶏を持って来て, 午前中彼らは闘鶏を楽しみ, 昼食後はボールゲームをするために野原に行く. あらゆる学校の生徒達はボールやバトンを手に入れている. そして, 都市の古老達や富裕者達は若者のスポーツを見に馬に乗って野原に行き, 彼らの軽快さを見て楽しむのである.」²¹⁾ <At Shrove Tuesday, that we may begin with children's sports, seeing we all have been children, the school-boys do bring cocks of the game to their master, and all the afternoon they delight themselves in cock-fighting; after dinner, all the youths go into the fields to play at the ball. "The scholars of every school have their ball,

or baston, in their hand: the ancient and wealthy men of the city come forth on horse back to see the sport of the young men, and to take part of the pleasure in beholding their agility>, このようにキリスト教の祝祭日と結びついたスポーティな活動は中世の共同体社会生活の中で行なわれ, また組織的なギルド訓練の下での組合員の間でも行なわれた.²²⁾ また, このようなスポーティな活動がしばしば危険なものを伴うことがあり, 教会と政治力によってそのようなスポーティな活動に対しては『禁止令』がだされるほどであった.²³⁾ さて, ジョン・ストウ (John Stow, 1525-1605) やジョン・イヴェリン (John Evelyn, 1620-1706) の時代においても市長や教区の司教達によって民衆のスポーツ Volkstümlichspiel に対する『禁止令』が出されたが, それは単にスポーティな活動そのものの性格によるだけのものでなく, 社会的階級的色彩をおびたものとして公布されてくるのである. エドワード一世は, 『武装条令』によって, イギリスにおける土地所有者のすべてに長弓の使用を強制するとともに, テニスや球転しや九柱戯等のスポーティな活動を不法とする一方, 土地からの収入が40シリング以上ある者はすべて自分の弓と矢をもたなければならないとしたのであった.²⁴⁾ このようなことは, D. Brailsford²⁵⁾ や R. Malcolmson²⁶⁾ も指摘しているように, そこには社会的共同体 Sozialgemeinschaft としての民衆自身の文化 (The common people's own culture of social interdependence) としてのスポーティな活動の秩序というものが崩壊し始めると同時に, 階級的色彩 die Klassenfarbe の強いブルジュアジー依存のスポーティな活動が出現してくるのである. それはまさに hunting, hawking, hounding といった野外で実施されていたスポーティな活動が農業革命 (Enclosure, Inclosure) という社会的変動の下で崩壊, 消滅していった, つまり民衆的スポーツ Volkstümlichspiel の成立基盤の喪失と成立条件の喪失に諸々の『禁止令』は拍車をかけるものであったろうと思われる. 中世における村落——それは相互扶助の結合体であり, 「奉仕と保護とに結ばれた団体であり『小さな共和国』」であった²⁷⁾, そのようなものがエンクロイジャー等の社会的条件の下でブルジュワ化してくる中産の生産者層によって犠牲になっていたのであることは容易に察せられよう. さて, イギリスにおいては狩猟法なるものも中世の領主たちと農民たちとの間に最も鋭いスポーティな活動に対する階級的対立 Klassengegensatz となった. 「農業プロレタリアートに対するとくにいちじるしい残虐行為は狩猟法であった. この法律は, イギリスでは, 他国にその例をみないほど厳格である. ところがそれと同時に, 獣獣の方は

むちゃくちゃにたくさんいるのである。古い風習と慣例にしたがって、密猟とは、勇気と度胸のまったく自然で、高尚なあらわれだとしか考えないイギリスの農民は、自分自身の貧困と、何千もの兎や猟鳥を自分の個人的娯楽のために保護している貴族の『それが余のきばらしであるから (car tel est notre plaisir)』といった理由とを比較することによって、ますます密猟に駆りたてられるのである。」²⁸⁾、このような状況にあって農民は狩猟のためには領主を宿泊させる義務を負い、耕地、家畜等を荒されることを黙認しなければならなかったのである。さらに、狩猟の対象物となる野獣を殺した時は厳罰をもって罰いられたのである。さて、ルネサンス期において、そこにはまだ近代的スポーツの形成をみるにはいたらなかったが、社会的変動の中で民衆のスポーツ Volkstümlichspiel は、貴族的ブルジョワジーによって自分達の生活や教育の一部として、役立てるものにしていったのである。このような時代的背景として16世紀イギリスは、ルネサンス文化を受容し、これと融合し原理的にはカトリックに接近し、生成しつつある絶対主義と抱き合う型で、この絶対主義の理論的構築を助長するかたちをとったのである。そしてルネサンス文化はカトリックと結合し、反宗教的文化としてイギリス社会を支えていくのである。こうしてスポーティな活動においても、封建的・貴族的スポーツと民衆のスポーツ Volkstümlichspiel とに分離状態が芽ばえ始めるのである。このようなスポーティな活動の性格的分離状態こそは、やがて産業革命期において形成されてくる近代スポーツにおける思想的二重構造ともいべきイギリス特有の性格の思想的準備段階でこそあったらうと思われるのである。

II Puritanismus の性格とスポーツ

中世的な社会体制が崩壊するにもなって中世の代表的階級であった騎士階級に代って中産の生産者階級が次第に抬頭してくる。イギリスにおいて、スポーティな活動が近代的スポーツと呼ばれるようにその形をあらわしてくるまでには、それが封建的特色 feudaleigenheit をおびながらも各層に広く実施されていたのであるが、しかしながら、中世後期からの社会的変動は²⁹⁾、それまで実施されていたスポーティな活動をも変化させるものであった。このように、イギリスにおいて封建的スポーツを近代的スポーツへと転化発展させていった社会的条件 sozialbedingung というものがようやく抬頭してくるのである。しかもその最大の原因こそは中世後期より社会的成長をとげてきた中産的生産者層であった。このような中産的生産者層の社会的発展は、イギリスにおいて封建的スポーツを近代的スポーツへと発展させていった

社会的条件 sozialbedingung としての思想的役割を意味するものであったと思われる。では封建的社会から近代的社会への転化発展という、その思想的社会的条件とは何であったらうか。「この中世から近代への転換の間において、歴史の歯車を決定的に回転させたのはピューリタニズムである。」³⁰⁾ というように、それは中産的生産者層にとっては社会学的指導者ともいべき Puritanismus であって、その規律ともいべき『禁欲のプロテスタンティズム』の精神的支柱こそは、近代化を推進していくための源動力でこそあったらうと思われる。イギリスにおいて、Puritanismus の社会的発展転化こそは、中世後期より社会的成長をとげてきた中産的生産者層そのものの社会的成長を意味するものであったらうと思われる。それはまた、スポーティな活動に関して言えば、近代的スポーツの思想的発展過程をも意味するものであらうと思われる。しからば、このような近代的スポーツの思想的形成の源動力となり、又中産的生産者層の社会的成長の原理であったらうと言われる Puritanismus の性格とはどのようなものであったらうか。このことについて、われわれはイギリスの Puritanismus がきわめてブルジョワ的性格を強くしていたものであったということを数々の Puritan 革命研究史から学び知ることができる。³¹⁾そしてそこから教えられることは Puritan 革命がブルジョワ的革命であったがゆえに、チャールズ二世の王政復古を許し、名誉革命を必要としたことであり、文化史的には近代化を思想史的側面から準備ならしめた啓蒙時代を押し進めたということであらう。さて、このようにイギリスの Puritan 革命をブルジョワ的革命であったと規定していく時、革命の担い手となった社会的階級というものが、封建体制の解体のなかで社会的に成長しつつあった市民的中産者層であり、後には産業資本家に発展する社会層であったことを知るのである。このことは Puritan 革命がブルジョワ的革命であったことを物語るものであり、この革命の担い手となった社会層のスポーツに関する思想的な態度は、近代的スポーツの思想形成に規定性をもつようになるのである。又 Puritanismus の『禁欲』 Askese というものが「日常生活からの逃避ではなく、むしろ日常の職業労働のただなかにおいて、人間的弱さのあらわれであるもろもろの衝動、欲求、雑念を断り切っておのれの仕事に専念し、これを通じておのれの境遇を変えらるとともに、ひいては世界を革新するためにする自己抑制と自己没却」³²⁾、というものこそ、近代資本主義の精神的支柱である合理的禁欲的な職業専念のエトス³³⁾であり、このようなものこそ中産的生産者層の生活態度そのものであったし、このような Puritanismus の『禁欲』 Askese であればこそ「大衆のあらゆる経済的、市民的要求」³⁴⁾に結合

していったのであり、いいかえれば、当時の社会的、歴史的條件 *gesellschaftlich-historischen Bedingung* のなかで中産的生産者層が次第に形成しつつあった人間像に『プロテスタンティズム』が宗教的にその人間像の形成過程に方向を与え、かつその過程を助長したと思われるのである。³⁵⁾ さて、このように Puritanismus の社会的成長は新興ブルジュワジーの社会的成長を意味するものであったろうと思われる。このことは近代的スポーツの形成にあたってその思想的風土に重要な規定性をもってあらわれてくるのである。それはルネサンスのユマニストが主張していた人間像というものが、この生成しつつあった新興ブルジュワジーが目指す、貴族的生活の模倣という生活態度の目標となり、それが絶対主義の下で発展していくのである。もはやそこにおいてはイギリスの近代的スポーツの形成において、きわめてブルジュワ的思想の素地を用意していたものと思われるのである。このように、Puritanismus の性格というものがブルジュワの要素を持ち合わせながらもそれが宗教的要素と結合しながら、つまりきわめて経済的実践と宗教的革新とによって、ブルジュワジーの性格をその社会的好条件のもとで発展展開していくのである。

III Puritanismus の規定とスポーツ

「Puritan は、人間生活からあらゆるスポーツやゲームを忘れさせるために、彼らの布教を考えた。」³⁶⁾、「疑いなく身体的娯楽に対する Puritan の態度は通常敵意のあるものだった。」³⁷⁾、「一般大衆はこれらの血なまぐさい娯楽に賛成し続けたとしても清教徒たちは決して是認しなかった。」³⁸⁾、このように Puritanismus の『禁欲』Askese という社会的規定によるスポーティな活動への厳格な態度については数々の史料が明示してくれるのである。それはイギリスにおいて、民衆がもっていた伝統的スポーツ *traditionellspiel* のほんのわずかな機会をも奪ってしまったのであり、このような Puritanismus の態度はイギリスの風習に決定的な痕跡を残したのである。では、Puritanismus の規定はスポーティな活動に対して、どのような規定であったのだろうか。「文化と信仰における感覚的・感情的な要素へのピューリタニズムの絶対否定的な立場——さらに彼らのあらゆる感覚的文化への原則的な嫌悪」³⁹⁾、このような Puritanismus の感覚的文化 *sinnlichkultur* に対する否定的、嫌悪的な態度こそは、かれらにとって伝統的な中世の墮落した被造物であるとされ、それらのものを合理化し倫理化していく過程であっさりと消滅させていったのである。このようにして Puritanismus の『禁欲』Askese の規律は、「たとえば、この時代の特別なお祭りに対してその初まって以来ずっと愛着をもちつづけ

ていた人気のあるゲーム」⁴⁰⁾をも消滅させ、宗教的祝祭日や、又安息日に民衆の間で実施されていたスポーティな活動に対しても倫理的規定を加えていったのである。⁴¹⁾このように、Puritanismus の規定というものが生産的労働というものを〈社会的徳〉と同様に〈神聖〉なものとみなした時、感覚的、感情的なものに訴えるスポーティな活動は浪費とみなされたのである。しかしながら、Puritanismus の生活的態度が「学問以外の文学、さらに感覚芸術の領域にふくまれるものに対するの楽しい古いイギリスの生活、五月柱やキリスト教的クリスマス祭さえも迫害」⁴²⁾するようになった時、Tawney が指摘するように、社会生活と宗教的生活を関連させた Puritan のイデオロギーは主権と衝突するようになってくるのである。⁴³⁾この Puritanismus と主権との衝突を物語る代表的なものこそ『Book of Sports』をめぐる斗争であったろう。⁴⁴⁾そこにはブルジュワジーの精神的エネルギーを理想化した Puritanismus の職業観と禁欲的生活態度に対して「王制的・封建的社会において抬頭してくる市民的道德と反権威的、禁欲的な私的集合に対抗して『享楽意欲のある者』を保護する」⁴⁵⁾いふなれば、国民的娯楽が法律上守られるべきであるとする国王が合法的なスポーティな活動という、合法性に対する攻撃に対して厳罰をもって主張したのに対して、安息日遵守主義 (*sabbatarianism*) とか、『世俗内的禁欲』という規律の生活が乱されると主張する Puritanismus との斗争であったが、なによりもそれは国王にとって反権威主義と、カルヴィンの生活規律⁴⁶⁾に反対するブルジュワジーの抬頭に危惧を抱いてのきわめて政策的なものであったろうと思つた。Weber によって、「道徳的にきわめて厳格な禁欲主義的色彩を有する人々」⁴⁷⁾と規定された Puritan たちにとっては、『働くことは祈ること』⁴⁸⁾であり、娯楽をさげすみ、労働においては時間正しく、祈りを怠らない、このような Puritanismus こそはまさしく中産的生産者層の指導者であった。このような Puritanismus の倫理的規定はスポーティな活動を社会的生活行動の枠外に押しやり、とくに伝統的、民衆のスポーツ *traditionell-Volkstümlichespiel* による時間の浪費は罪悪なものとされたのである。⁴⁹⁾「遊戯はただ合理的な目的、つまり肉体の活動力に必要な休養のために役立つものでなければならなかった。」⁵⁰⁾し、又認められたものといえば「衛生上の理由から許されるものと『そのはらい内でのスポーツやその他のレクリエーション』」であった。⁵⁰⁾このように Puritanismus によるスポーティな活動に対する有用性とは、経済的有用性のみその利用価値を認めたのであり、「健康は、まじめに労働し、そして公私的なできごとのためのまじめな娯楽としてしか存在」しなかったの

である。それ以外のことは Puritan にとって、「衝動的のままにこだわりなく生活を楽しむための手段としてスポーツの遊戯や単なる享楽の手段とされたり、いやしくも競技上の名誉心とか、競争に対する粗野な本能や非合理的な欲望をおこさせる場合には、もちろん端的に排斥させるべきであり、それは貴族的な遊戯^{スポーツ}であれ、職業労働や信仰を忘れさせるような衝動的な快楽は、そのまま合理的な禁欲」の敵であったのである。⁵¹⁾ このように、Puritanismus にとっては疑いなくスポーティな活動に対する態度が、その本能的享楽の問題としてとらえられたのであり、意識的、明徹な生活態度を課題とする Puritanismus の合理的人格形成とは対立するものであった。このように、《Puritanismus による世俗内的禁欲》という規定によって伝統的スポーツ traditionellspiel は非合法なものとみなされ、民衆間の娯楽としては「友人の訪問、歴史書の継続、数学的および物理学的実験—」⁵²⁾ などであり、Puritanismus の規定による民衆的スポーツ Volkstümlichspiel の攻撃は、イギリスの民衆から「楽しい日曜日」を奪ってしまったのである。

IV Puritanismus の変化とスポーツ

あらゆるスポーティな活動に対する Puritanismus の干渉が長い間有効かつ厳格なものであったことは、かれらの社会的行為に関する独自の規律からくるものであった。⁵³⁾ このように、Puritanismus のスポーティな活動への攻撃の理由には宗教的条件からくるものもあったが、もう一つは社会的成長をしてくるブルジュワジーの利害関係から生まれたものでもあった。このように Puritanismus の宗教的条件と社会的条件のもとにスポーティな活動が攻撃されたのであるが、さらにもう一つには階級的意識からくるものがあった。それは職業的倫理規律で生活態度を遵守していく Puritan の人々にとって余暇を楽しむ貴族の上層階級に対する不満の形となってあらわれたのである。⁵⁴⁾ さて、「清教主義の理論は、以前は規律であった。ところがその実際的な結果は自由となったのである。」⁵⁵⁾ このように16世紀から17世紀にかけてのイギリスにおいて、Puritan 革命は宗教的革命というより、中世末期より進出してきた中産の生産者層と貴族階級との勢力争いであり、そこで展開されたのは、階級間における社会的、経済的斗争であった。革命史の教えるところによれば、このような Puritan 革命の性格は宗教的斗争というより、むしろ社会的階級斗争の要素が強かったのである。そして結果的には、進歩的中産者層と下層階級にかかわって守保的中産者層と貴族層との妥協・融合が王政復古を実現するのである。⁵⁶⁾ ここにおいて、イギリスの Puritanismus の展開はブルジュワの革命としての色彩を強くしたのである。しか

も、イギリスにおいてカルヴィニズムの担い手でもあった中産の生産者層にあって、その Puritanismus の社会的成長は、その人間像をも次第に変化させてくるのであるが、それは、Weber が指摘する「禁欲的合理的」な人間像とは異なった新しい人間像ともいうべきものを生みだしてくるのである。「強力な宗教運動の経済的発展に対する意義は、何よりもまず、その禁欲的な教育作用にあったが、——それが経済上の影響力を全面的にあらわすにいたったのは、普通には純粹に宗教的な熱狂がすでに頂上をとおりすぎ、神の国を求める激情がしだいに冷静な職業道徳にまで解体しはじめ、宗教的根基が徐々に生命を失って功利主義がこれに代わるようになった。」⁵⁷⁾ このように、Puritanismus の展開においてみられた中産の生産者層の人間像は、その初期において敬虔なる信仰という規律によってさええられていたのであるが、しかしながら中産の生産者層の社会的成長は、その人間像をも現世的、合理的、功利的な側面をあらわしてくるのである。そしてそこにおいては、Tawney が指摘するように「英国のような社会的、政治的な条件の下にあっては、清教主義が形をかえていくのも止むをえないことであった。」⁵⁸⁾ し、もはやイギリスにおいて「貴族的で、ますます商業的になっていこうとしていた英国国民の地主やブルジュワジーが、カルヴィン主義的な規律のなかに含まれる社会理論」⁵⁹⁾ を維持していこうとするような社会的条件 sozialbedingugn は消滅していこうとしていたのである。さて、このような Puritanismus の社会的成長のもとでスポーティな活動はどのような状況におかれていたのであろうか。「安息日厳守も時にはばかばかしいほどの長さに達し、クロムウエルの厳格な支配のもとで、大勢のロンドンっ児たちは言うことをきかなくなっていた。」⁶⁰⁾ というように庶民の間にも王政復古を望むような社会的動きがただよいはじめた時、あの中産の生産者層はきわめて貴族的ブルジュワの傾向を強めていき貴族社会との交流の中でジェントルマンのスポーツをもつようになっていったのである。しかしながら、Puritanismus の社会的成長はそこに近代的市民像を求めるようになっていくのであるが、このようなことは中産の生産者層の内部にあって資本の形成と近代労働力の教育とが問題になってくるのである。そして、このような中産の生産者層の内部における二つの結果こそは、近代イギリススポーツの形成において思想的にもイギリスの近代スポーツに思想的二重構造というものに投影していくのである。

暫定的結語

イギリスの近代スポーツの思想的 研究の方法として、その創出期に視点をしばりつつ、Puritanismus の

の思想的展開との係り合いで、近代イギリス・スポーツの思想的二重構造というものが、Puritan 革命の推進的役割を果たした中産の生産者によって準備されてきたものであることをみてきた。このように近代において、かれらの思想が展開されると、イギリスにヨーロッパ的身体訓練の学校教育への導入という思想が生みだされてくるのである。さて、Puritanismus が市民的思想としてとらえられるならば、この Puitan 革命の成果からみはなされた民衆グループのことも合わせて考えていかなければならないように思われる。これらのグループの諸思想こそは、後になって反資本主義的近代思想の原型を示すものであり、これらの運動はチャーチズム運動へと継承され、ジョンペラズをえて、ロバート・オーエンへと連続するのである。

このように Puritanismus の社会的成長は必然的に内部に二つの課題を生じてくるのである。近代イギリス・スポーツにおいて、この二つの課題こそは、一つにはルネサンスのユマニスト的身体観を発展成長させながらブルジュワ的スポーツを形成させ、他方においては労働者の資質の問題としてヨーロッパ的体操を適用していきのであり、《階級があって安定がある》といったイギリス人の公理は近代化がかかえた二つの課題をスポーツの面においても近代スポーツの二重構造をつくり出すことによって思想的に解決していったと思われる。

参考・引用文献

- 1) J. Strutt : Sports and Pastimes of People of England, London, 1833.
Introduction, b 《In order to from a past estimation of the Character of any particular people, it is absolutoly, necessary to investigate the Sports and Pastimes most generally prevallent among them》
- 2) Andrzei Whol : Die gesellschaftlich-historischen Grundlagen des burgerlichen Sports, pohl Rugenstein Verlag, Köln 1973. P24
上野卓郎「ヴォールの近代スポーツ史論」大修館, 体育の科学, 1978. 1月号 P64
- 3) Beresford, M : The lost village of England, London, 1954. P270, 林 達「イギリス革命の構造」学文社, P87
- 4) 太田秀通「スパルタとアテネ」岩波書店, P22~23
- 5) たとえば中世において王侯・貴族によって行なわれていたものに, tournaments, just があつたが騎士制度の衰退とともに形式化してしまつた。
- 6) ここにおいてブルジュワ的スポーツというのは、産業革命期を終えて現らわれてくるブルジュワジーの自由・平等思想から生まれたスポーツの存在をいう。例えば18世紀に入ると貴族とブルジュワジーはそれまで以上にスポーツができる社会的条件をつくり出した。そこにおいて狩と騎馬はかれらを代表するスポーツとなる。
- 7) トーニー著, 出口, 越智訳「宗教と資本主義の興隆」下巻, 岩波書店, P113
- 8) 大塚久雄「社会科学における人間」岩波書店, P131, 城塚登「近代社会思想史」東京大学出版会, P63, 宗教改革運動をにない推進していったのは、当時封建制の解体のなかで次第に成長しつつあつた中産の生産者層(中小商品生産者としての農民層と職人層)であつたが、後に産業資本家にまで発展するこの社会層の要求に応えるものがあつたがゆえに、宗教改革は生産的な現世肯定の構造をもち、また広汎な勤労民衆の心情と生活を深くとらえ、結果的には社会学的に驚異的な生産性を発揮したのである。
- 9) 例えば, Elyot, T 「The Book Named The Governor」1531, John Milton 「Areopagitica and of Education」, John Locke 「Some Thoughts concerning Education」, これらの教育思想にみられる体育論は、イギリスのルネサンス期, 宗教改革期, 啓蒙期における体育思想の代表的なものと考えられるが、しかし、これら三者の体育思想の並列的研究方法によってではなく、これら三者の思想を社会的条件を背景としながら立体的構造的な研究方法がとられなければ、近代イギリスの体育思想を解明することは困難のように思われる。Elyot, Milton, Locke の体育思想の比較研究については、その草稿は大部分手許に整えてあるが、別稿で記すつもりである。
- 10) 城塚 登「近代社会思想史」東京大学出版会 P8
- 11) ここにおいての『選択的透過作用』というのは、Puritanismus における『禁欲』の解釈の仕方についての表現方法であり、いうなれば『禁欲の変化』がどのような歴史的経過をたどつて近代体育・スポーツというものを創出するに至つたのか、——例えば《城丸章夫, 「現代教育学14, 身体と教育」岩波書店, P2》が指摘しているように、Puritanismus の『禁欲』とは何を禁じ、何を承認するのかという内容のテーゼであり、ルネサンス期の快樂主義も、Puritanismus の『禁欲』主義も貴族的スポーツ、又は民族的スポーツに対する批判でこそあつたろうと思われる。

- 12) Andrzej Wroblewski: Die gesellschaftlich-historischen Grundlagen des bürgerlichen Sports, Pohl Rugenstein Verlag, Köln 1973. P9
上野卓朗「ヴォールの近代スポーツ史論」大修館, 体育科教育 1978. 1月号 P24
- 13) 浅田 隆夫「身体運動文化としてのスポーツ」(I) 日本体育社, 学校体育, 1977. 4月号 P137
- 14) ヨハン・ホイジンガ, 高橋訳「ホモ・ルーデンス」中央公論社, P 326
- 15) Dennis Brailsford: Sports and Society Elizabeth to Anne Routledge & Kegan Paul, London, 1969. P17
- 16) 越智武臣「ジェントルマン・イデアールの形成」立命館文学, 1962. 7月号 P37.
本論によれば, ヒューマニズムと Puritanismus とは, イギリスにおいて教育の二つの型の差異であり, 同時に社会的階級の差異であり, 総じて二つの文化のパターンの差異として定着した思想となったといわれる。
- 17) 加藤 元和「近代体育の歴史とその思想」タイムス社, P58
- 18) ミッチェル, 松村訳「ロンドン庶民生活史」みすず書房, 1971. P27~28
- 19) John Stow: The survey of London, Everyman's Libery, London, 1970. P85
- 20) ibid P85
- 21) ibid P84
- 22) Van Dalen: A world history of physical Education, prentice-Hall 1971. P117
- 23) R. Malcolmson: Popular Recreation in English Society, 1700—1850, Cambridge University Press, 1973. P5
- 24) アンドレ・モロア, 水野・小林訳「英国史」上巻, 新潮文庫, 1965. P218
- 25) R. Malcolmson: Popular Recreation in English Society 1700—1850, Cambridge University Press 1973. P57
- 26) D. Brailsford: Sport and Society, Elizabeth to Anne, Routledge & Kegan Paul 1969. P31
- 27) トーニー, 出口・越智訳「宗教と資本主義の興隆」下巻岩波書店, P26
- 28) 「マルクス=エンゲルス全集」(2)大月書店, P499
- 29) クリストファ・ヒル, 浜林訳「宗教改革から産業革命へ」未来社, P20
- 30) 大木英夫「ピューリタン」, 中公新書, P21—22
- 31) 白杉庄一郎「ピューリタン革命と産業ブルジョワジー」彦根論叢14号, 1953
飯沼二郎: イギリス近代史におけるブルジョワ革命の位置 P258, 桑原武夫編「ブルジョワ革命の比較的研究」筑摩書房
- 32) 世界の名著, 「ウエーバー」中央公論社, P84
- 33) ibid P85
- 34) トレルチ, 内田訳「ルネサンスと宗教改革」岩波書店, P39
- 35) 城塚登「近代社会思想史」東京大学出版会, P64
- 36) Dennis Brailsford: Sport and Society, Elizabeth to Anne, Routledge & Kegan Poul, 1969. P141
- 37) ibid P127
- 38) ミッチェル, 松村訳「ロンドン庶民生活史」みすず書房, P91
- 39) 世界の名著, 「ウエーバー」中央公論社, P176
- 40) Dennis Brailsford: Sport and Society, Elizabeth to Anne, Routledge & Kegan Paul, 1969. P50
- 41) Puritanismus において倫理的規定を加えられた Sport は民衆的なものだけでなく, ブルジョワのスポーツに対しても適用されたが, しかしそれは民衆的スポーツほど徹底したものではなかった。
- 42) 世界の名著「ウエーバー」中央公論社, P268
- 43) トーニー, 出口・越智訳「宗教と資本主義の興隆」岩波書店, 下巻, P150
- 44) Gardiner: The Constitutional Documents of the Puritan Revolution 1625—1660, Oxford, P99—103
- 45) 世界の名著「ウエーバー」, 中央公論社, P266
- 46) ibid P267
- 47) 水田洋「イギリス革命—思想史研究—」, 御茶の水書房, P29
- 48) トーニー出口, 越智訳「宗教と資本主義の興隆」, 下巻, 岩波書店, P158
- 49) 世界の名著「ウエーバー」, 中央公論社, P267
- 50) ibid P203
- 51) ibid P267
- 52) ibid P273
- 53) トーニー, 出口, 越智訳「宗教と資本主義の興隆」岩波書店, 下巻, P144
- 54) ibid P150

- 55) *ibid* P148
- 56) 小林政吉「宗教改革の教育史的意義」創文社、
P120
- 57) 世界の名著「ウエーバー」、中央公論社、P283
- 58) トーニー、出口、越智訳「宗教と資本主義の興隆」
岩波書店、下巻、P148
- 59) *ibid* P148
- 60) ミッチェル、松村訳「ロンドン庶民生活史」みすず
書房、1971. P119
- その他
- Richard L. Greaves : The Puritan Revolution and Educational Thought, Rutgers University Press, 1969
 - Arthur F. Leach : English Schools at the Reformation 1546—8, New York, 1968
 - Peter Laslett : The World we have lost, Methuen and Company Limited, 1965
 - Harold Perkin : Education in Renaissance England, London 1965
 - John Carswell : From Revolution to Revolution : England 1688—1776, London, 1973
 - William B. Boulton : The Amusements of old London, London 1969
 - C. Hole : English Sports and Pastimes, Book for Libraries Press, 1948
 - Foster Watson : The English Grammar Schools to 1660, London 1968
 - Gerhard Schneider : Puritanismus und Leibesübungen, Verlag Karl Hofmann, Stuttgart
 - 川口智久他「現代スポーツ論序説」大修館書店
 - 中村敏雄他「スポーツ教育」大修館書店
 - 山本政雄「スポーツの社会・経済的基礎」道和尚院
 - 浜林正夫「イギリス市民革命史」未来社
 - 越智武臣訳「宗教改革の時代、1517—1559」みすず書房
 - 加藤橘夫訳「体育の世界史」ベースボールマガジン社
 - 越智武臣「近代英国の起源」ミネルヴァ書房
 - 「世界教育史大系(7)イギリス教育史Ⅰ」講談社
 - 「世界教育史大系(8)イギリス教育史Ⅱ」講談社
 - 「世界教育史大系(9)体育史」講談社
 - ヨハン・ホイジンガ、兼岩他訳「中世の秋」創文社
 - B・ウイレー、深瀬訳「17世紀の思想的風土」創文社
 - アイヴズ編、越智武臣監訳「シンポジオン英国革命」ミネルヴァ書房
 - トレヴェリアン、松浦訳「イギリス社会史」1, みすず書房